

言語教育論講義ノート5

I 情報のなわばり理論とは？

1. 神尾(1990)『情報のなわ張り理論』: 話し手のなわばりに属するか聞き手のなわばりに属するかは与えられた情報が話し手および聞き手にとって遠か近かによる。

佐久間はいくまでも指示詞(これ、あれ、それ)のような単語の「なわばり」を問題視

神尾は1つの文全体によって表現される情報にも「なわばり」の概念が重要な役割を果たしている

→「情報のなわばり理論」

情報の遠近規定条件(近の場合)

1. 話し手自身が直接体験によって得た情報
2. 話し手自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表す情報
3. 話し手自身の確定している行動予定および計画などについての情報
4. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表す情報
5. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報
6. 話し手自身の職業的あるいは専門領域における基本的情報
7. 話し手自身が深い地理的關係を持つ場所に着いての情報
8. その他、話し手自身に何らかの深い関わりを持つ情報

		話し手のなわばり	
		内	外
聞き手のなわばり	外	コ	ア
	内	ソ	

2に入る前にちょっと脱線、1. 9

(1) 英語と日本語、言語的にどっちがなわばり意識が強い？

所有の表示の問題

日本語においては状況から明らかな場合はあえて省略(この場合省略できるというよりは省略したほうが日本語らしい日本語となる)

- (2) a. Wash **your** hands. 手を洗ってください。
- b. **My** head hurts. 頭が痛い。
- c. Please take **my** plate. 皿を下げてください。
- d. I have something good in **my** pocket. ポケットに良いものがあるんだ。

- (3) A: こんにちは。  
 B: こんにちは。  
 A: まず、お名前からお聞きしたいんですけど。  
 B: 田中一彦です。  
 A: ご結婚されていますか？  
 B: ええ。  
 A: お子さんはいらっしゃいますか？  
 B: はい、娘がひとりいます。  
 A: そうですか。ところで、年はいくつですか？  
 B: この4月で2歳です。

2. 「情報」になわばりってある？

2.1 情報は誰のものか？

- (1) 私は1961年10月26日生まれです。
- (2) 10月26日は私たちの結婚記念日です。
- (3) ここは空気が新鮮だ(ね)。
- (4) 君は昨年ベルギーに行ったね。
- (5) 君は1986年7月生まれだね。

# 基本的には話し手、聞き手が誰かに加えて、「情報の内容」に基づいて情報を誰のものであるか判断する。

(3)は境界線上！

ここは空気が新鮮だ(ね)。

1. 話し手と聞き手がある場所に来て、その空気が新鮮であることを初めて感じ、話し手が(3)のような発話を行う場合。この場合には、話し手、聞き手ともに「ここは空気が新鮮だ」という情報を初めて、しかもほぼ同程度に認識していると考えられる。すなわち、話し手も聞き手もこの情報をそれぞれのなわ張りの中に持っていると考えられる。
2. 話し手がその場所についてよく知っており、聞き手はその場所に初めて来たという場合。話し手は過去の経

験からその場所の空気が新鮮であることをよく知っており、一方聞き手は初めてそこの空気の新鮮さを知ったとする。このような状況では、話し手はその場所の空気が新鮮であることを聞き手よりもよく認識しているので、「ここは空気が新鮮だ」という情報は話し手のもの、すなわち話し手のなわ張りに属すると考えられるかも。しかし、より正確に言えば、その情報は聞き手のなわ張りにも属していると見ることができる。なぜならば、聞き手も現に空気の新鮮さを直接体験によって実感していると想定されるからである。したがって、正確には、この情報は話し手のなわ張りにも聞き手のなわ張りにも属すると見なさなければならない。

3. 聞き手がその場所の空気の新鮮さかをねてから知っており、話し手は初めてそれを体験してその印象を(3)の発話としてもらった場合である。この場合には、明らかに第2の場面と同じことが話し手と聞き手を入れ替えた形で成り立つ。

(6)情報が話し手、聞き手のいずれに属するかあるいはそのどちらにも属さないかを決定する要因は、少なくとも

(i)情報の内容、

(ii)話し手、聞き手が誰であるか、

(iii)話し手、聞き手による情報の認識の度合、 によって決定される。

3. 情報と間接性

(1) a. ゆうなは退院しました。

b. ゆうなは退院したらしい/したようだ/してみたいです。

問題 (発話者は単身赴任で娘のゆうなとは一緒に住んでいない。妻からの電話でゆうなが退院したことを知る。) その翌日。

同僚 : 娘さん、元気になった?

ゆうなの父: おかげさまで、ゆうなは昨日退院しました。/ゆうなは昨日退院してみたいです。

参考: ゆうなの父: (突然の妻からの電話で娘の事故を知る) 取り乱すゆうなの父

同僚 : 何かあったのか

ゆうなの父: 娘が事故にあったみたいだ。/娘が事故にあったんだ。

(2) 金沢では今度水道料金が高くなるらしい。(単身赴任中の夫が妻からの電話で知る)

(3) 近所のお寿司屋さんがつぶれたようだ。(単身赴任中の夫が妻からの電話で知る)

妻が実際にそのお寿司屋の前の張り紙を見て夫に伝えとすれば、(3)の情報は妻の直接目撃した情報に基づいている。したがって、(3)の情報が妻の直接の目撃に基づいていないからと言って、(3)で間接形が許される理由にはならない。

☆ 自己の情報のなわ張りに属する情報に関しては直接形を用いなければならない。

(4) ゆうなは元気でやっているようだ。

父が留学先の娘からの葉書を読んだの発言。なぜ間接形が許されるか?

(i)情報の内容、(ii)話し手、聞き手が誰であるか、(iii)話し手、聞き手による情報の認識の度合、

(5) 金沢って結構大きな街だね(金沢を初めて訪れた友人の発言)

Cf 金沢って、結構大きな街だ。

- ・ 「ね」を付加して発話するのは、金沢についての情報は金沢が故郷である(聞き手の)田中の情報のなわ張りに属すると話し手が見なしている。 Cf. 「金沢って、結構大きな街だよ」

→話し手のなわ張りのみならず、聞き手のなわ張りという概念の重要性

# ちょっと寄り道

「たくさん勉強して夢をかなえてね」

長男に使われている「ね」という語尾は本質的に 仲間意識や連帯感を与える要素がある

Cf 「たくさん勉強して夢をかなえてよ」

(6) (秘書): (社長は取引先の人と面談中) お仕事中恐縮ですが、社長、3時から会議がございます。

(社長): 私は3時から会議がありますので

(同席の人物): 社長は3時から会議がおりだそうですから.....

??社長は3時から会議がおりですから.....

問題1 秘書はなぜ直接形を用いられるのか?

問題2 社長はなぜ直接形を用いることができるのか?

問題3 取引先の人物はなぜ間接形を用いなければならないのか?

「社長が3時から会議がある」という情報は秘書から社長に伝えられる際、取引先の人物も同時に受け取っている情報である。したがって、社長と取引先の人物とは、同一の情報を同時に同一の情報源から得た。すなわち、両者の間にこれらの点に関していかなる相違も存在しない

(7) 医師: ご主人は心臓が少し悪いんですよ。

妻: (息子に向かって)ハシは心臓が悪いんだって。

(8) 夫: 実は他に好きな人が出来たんだ。

妻：(息子に向かって)パパね、ママ以外に好きな人が出来たんだって。

◎フォーム・ファースト(生成文法的アプローチ) OR ミーニング・ファースト(機能文法的アプローチ)

- (1) Functional Grammar sets out to investigate **what the range of relevant choices are**, both in the kinds of meanings that we might want to express (or functions that we might want to perform) and in the kinds of wordings that we can use to express these meanings; and to match these two sets of choices.

In order to identify meaning choices, we have to look outwards at **the context**:

what, in the kind of society we live in, do we typically need or want to say?

What are the contextual factors that make one set of meanings more appropriate or likely to be expressed than another?

At the same time we need to identify the linguistic options (i.e. the lexical and structural possibilities that the language system offers for use), and to explore the meanings that each option expresses.

### **What the hell was that noise?**

- 1) Looking from the bottom up, the use of the 'the hell' in the question above means – i.e. has the function of expressing – informality (amongst other things): in other words, one thing that our grammatical description must account for is the lexical and structural means by which different degrees of formality are expressed.
  - 2) Looking from the top down, the fact that the speaker is talking to a friend makes appropriate the use of informal wordings: in other words, we need a description of the social context which includes degrees of familiarity between people interacting with each other as a relevant factor influencing their language choices.
- (2) The use of the term 'choice' does not necessarily imply a conscious process of selection by the speaker  
What we aim to uncover through a functional analysis are the meaning-wording options that are available in the language system and the factors that lead the speaker to produce a particular wording rather than any other in a particular context
- (3) One important implication of the functional view of language is that context and language are interdependent. This might seem too strong a way of putting it: it looks as though language could be seen as dependent on context. For example, a teacher may ask 'display' questions(提示質問 (ディスプレイ・クエスチョン) とは、教師が答えを知っていて学習者の理解を試すために行う質問のこと)  
Teacher: What is the woman wearing on her head?  
Student: A hat?  
Teacher: A hat, yes.

One could assume that this is 'allowed' because of the classroom context, where the teacher has a particular kind of authority; but it is equally true to say that, by speaking in this way, the teacher and student are contributing to creating the context as being that of a classroom interaction. If the same teacher behaved like this with the same student when they happened to meet in the street, it would almost certainly be inappropriate because it would project the context as if it were the classroom.

- (4) At a broader level, our experiences in the world clearly influence what we normally talk about and the way we talk about it.  
We constantly adjust the way we talk to the person we are speaking to so as to take into account what we think they already know, and to negotiate our moment-by-moment relationship with them (as I am doing with you – note how I have chosen to use the more interactive 'we' here rather than, say, 'speakers'); and the lexical and grammatical resources of the language therefore offer ways of conducting this negotiation. At the same time, the way we normally talk about these experiences (and the way we hear other people talk about them) influences the way we see them: for example, we generally accept without conscious query the fact that advertisers talk about their products as solutions to our problems (as opposed to talking about our willingness to pay for the products as the solution to the advertisers' problems, which is at least equally valid a view).
- (5) Choices amongst relevant options in context – we are deliberately opening up the path towards grammatically based text analysis (where 'text' means any instance of language in use):  
at each stage, we can ask why the writer or speaker is expressing this particular meaning in this particular way at this particular point.
- (6) Generative approaches take linguistics towards biology

Functional grammar takes it towards sociology: the systematic study of relevant features in the culture and society that form the context in which language is used, and which are at the same time constructed by the way in which language is used.

- (7) Both approaches, through form and meaning, ask essentially the same question about language: how can we explain why language has the main features that it does? But whereas the form-based approach finds the answer in the way our brains are structured, the meaning-based approach finds it in the way our social context is structured.